

## アイデア 長島確

長島確はつくりかた研究所の創設者。ドラマ  
トウルク。さまざまな演劇の現場を経て、ア  
トプロジェクトにも関わる。「つくりかたから  
考える」とはどういうことか。つくりかた研  
究所はどうあるべきか。頭を悩ませつつける。

つくりかた研究所、というのは、ひとつのアイデアです。アイデアというものは、あるとき誰か（一人とはかぎりません）の頭のなかで芽ばえ、他人と共有されたり、誤解されたりしながら、成長していきます。その途中でさまざまに使われ、何かの役に立ったり、何かを破壊したりしながら、どんどん姿かたちや意味合いを変えていきます。問題を解決したり、問題を起こしたりもします。もちろんアイデア自体が枯れたり、死んだりすることもある。

あるいは人間の側からいうと、アイデアを温めたり、こねくり回したりしながら、ひとはいろんなものを生み出したり、破壊したりします。アイデアを育てているつもりで、じつは自分が育てられていたりする。うっかりすると、アイデアのために生きたり、アイデアのために死んだりする。そこまで大げさでなくても、アイデアにはどこかしら希望のようなところがあるし、同時に呪いのような面もある。アイデアは恐ろしい。

つくりかた研究所は、ひとつのアイデアである一方、実体をもった組織として、東京都の文化事業である「東京アートポイント計画」のなかで、二〇一三年から三年足らず存在しました。その具体的な活動がどんなものであったか、説明するのはたいへん難しいのですが、つくりかた研究所という「アイデア」のたどった道をお話しすれば、何かが伝わるのではないかと考えました。

以下は、創設者の長島確の立場から語る、つくりかた研究所というアイデアが生まれてからの経緯です。

\*

つくりかた研究所につながる最初のアイデアは、演劇の現場から生まれました。演劇といっても、かなり特殊な現場です。私はそれまで十年以上、仕事として演劇の創作現場に深く関わってきました。その延長線上で、ひよんなことから「東京アートポイント計画」の枠内で、「戯曲をもつて町へ出よう。」および「アトレウス家」シリーズというプロジェクトをやらせてもらい、とても大変な目に遇いました。これらは演劇の発想やノウハウを劇場からもち出して、まちなかで何かをつくってみよう、という企画です。

劇場から一步出た外の世界は、自分が知っていると思っていた、演劇のつくりかたの常識がことごとく通用しない場所でした。

例えば、演劇の上演には場所が要ります。せっかく劇場から外に出るのだから、劇場つぽくない場所でやろう。ところがそういう場所を、どうやって探したらいいかわからない。見つけたとしても、どこに許可を取ればいいのかわからない。ひとつだけ具体的な話をすると、こんなことがありました。江戸川の河川敷で上演したいと考えて、あちこちに問い合わせた結果、公園を管理する役所から「(今回の企画であれば)金銭のやりとりと、占有さえしなければ、犬の散歩と同じです」という味わい深い回答をもらい、自分たちのやっていることは犬の散歩と同じかと感慨にふけりつつ、何度も下見し、計画を立て、いざ本番当日にその場所に行ってみると、いままでも一度も見かけなかった近所のおじさんが、平然と椅子を並べて釣りをしている。まもなく観客が来てしまうが、どいてくれとも言えない。パカパカしいかもしれませんが、こんなことの連続で、野生の力というか、ストリートの凄みというか、ちゃんと予約して借りられる劇場との違いを思い知らされました。

こんな「釣り人問題」を皮切りに、足かけ四年、試行錯誤するなかで、劇場の便利さを痛感するとともに、劇場の外でもっといろいろなことができそうだ、という期待の地平が広がるのを感じました。劇場という場所は演劇に最適化されていて、たしかに便利だけれど、逆に劇場が演劇の中身や見せかたを規定してしまうこともある。劇場から外に出たのなら、劇場とは違うやりかたで、違う文法で、もっといろいろなことができるのではないか(私の専門が演劇のため、劇場の話ばかりになっていますが、これは美術や音楽その他のジャンルにも言えることで、すでにそれぞれの分野で、そういった試行錯誤もされています)。

そして、そういうことをするためには、アーティストとは別に、その実現を助けるエンジニア(技術者)のような人材が必要ではないか。アーティストだけではなく、マネジメントやテクニカル(技術スタッフ)も、ストリートとかオープンフィールド、要するに各ジャンルに最適化された専用施設では「ない」まちや野山での経験を積み、ノウハウをもつ必要があるのではないか。ジャンルを横断し、内と外の混交するゾーンをよく知るエンジニアがあちこちにいれば、もっといろいろなものが生まれるのではないか。そういう特殊な人材はどうしたら増えるのか。こういったことを、私だけでなく、東京アートポイント計画ディレクターの森司さんや、私と一緒にやっていた建築家の佐藤慎也なども、二〇一〇年ごろには考え始めていました。

劇場には劇場に向けたつくりかたがある。劇場を出たら、別のつくりかたをしないといけない(というか、同じやりかたをより押ししたら、けつきよく「劇場」を再生産するだけで、

つまらない)。つくりかたから考えないといけない。つくりかたからつくらないといけない。アトレウス家のプロジェクトの最中にも、そういう問題意識から、「構造ゼミ」や「構造茶話会」という勉強会を設けたことがありました（当時は「構造」という言いかたでの問題を考えようとしていました。つくるプロセス、作品の自身、鑑賞体験の、それぞれがもちうる時間的・空間的な構造の全体を、どうしたら把握できるのか。このあたりのことは『アトレウス家の建て方』に書きました）。その次のステップとして、あらためて「東京アートポイント計画」のなかで、基礎研究と人材育成をかねたプロジェクトを始めようということになりました。ただし、「戯曲をもつて——」や「アトレウス家」の反復再生産ではつまらない。それにこういうことは授業形式では教えにくい。座学ではなく、実地で試行錯誤できるようなラボがいい。

こういう下地があつて、やがてつくりかた研究所というアイデアが生まれました。二〇一三年春のことです。

\*

研究所であるからには、研究員を集めます。

研究員は二層に分けることにしました。すでに何らかの「つくりかた」を修得し、専門としている「ベテラン」枠。そして人材育成の対象である「若手」枠。ベテラン／若手で二層化したのは、人材育成が目的でありながら、教師／生徒の関係にしたくなかったからです。教師／生徒となると、教師は上からモノを言うようになりやすいし、生徒は生徒で口を開けてエサを待つてるだけの「お客」になりかねない。関係上、与える側／もらう側がくつきり分かれてしまう。その関係自体が悪いわけではないけれど、ここは研究所だ、学校ではない。だから、学校の授業みたいにならないように、教師／生徒の代わりにベテラン／若手の区分にしたのです。

このアイデア、じつは刑事物のドラマが元ネタで、ベテランと若手の刑事が組んでひとつのヤマを追うイメージでした。これだと、ベテランからいろいろ教わりつつ、ミッシェンはあくまで（捜査という）共同作業にできる。助け合ったり、競ったり、出し抜いたりもできるかもしれない。そんなことを考えての二層でした（これでは研究所ならぬつくりかた警察ではないか、とは問わずに）。

ベテラン枠のほうは、ほぼ私の独断で、このプロジェクトに加わってもらったら面白そうな人を選び、声をかけました。演出家、写真家、建築家、映像ディレクター、文筆家、そして音楽家。私自身を含め、みなベテランというほどの歳でもキャリアでもないので、

ベテラン枠というのはなんだか居心地が悪い。でもいま述べたような、研究所の構造に関わるアイディアなので、ガマンしてもらおうしかない。のちに「研究主任」と呼ぶことにしたけれど、最後まで定着しませんでした。「中堅」にでもすればよかったか。

一方、若手枠は、公募をすることにしました。

告知にはチラシとウェブを使い、つくりかたから考える研究所を開設すること、若手を募集すること、ベテランと一緒に企画に取り組むこと（当初は「だれかのみため」というパフォーマンスのイベントを想定していました）、人材育成だけと学校ではないこと等々、趣旨を説明するために、私が長々と文章を書きました。よくある人材募集のような、諸条件だけが事務的に箇条書きされている募集要項には、絶対にしたくないと思っていました。そのような形式だと、どうしてもお互い、権威や知名度や肩書きや経歴や資格といったもので判断しがちになる。それはいやだ。そんなものは、たぶんこの研究所では通用しない。それよりもこちらの考えをちゃんと伝え、それを受けて応募してきてくれる、やはり何かを考えようとしている人を探りたい。

約一か月の募集期間を設けて、応募を待ちました。募集人数は一二名としていたのですが、予想をはるかに上回る三〇名の応募がありました。しかも、勘違いとか記念受験的な応募が一人もいなかった。みな募集の文章をよく読んで、切実な何かをもって応募してく

れていて、採否を決めるのは大変なことになりました。

問題は決めかたです。応募者全員と個別に面談をし、最低でも一時間、長いと二時間近く話をしました。こちらからも、何を考えてこの研究所を始めようとしているのかを丁寧に伝え、応募者にも、日ごろ何を考えているのかを根ほり葉ほり聞かせてもらいました。たんなる情報のやりとりだけではなく、お互いの感情が動くまで話そうと決めていました。感情が動く、というのは、この人はこういうことを嬉しがるんだ、とか、こういうことに憤りを感じてるんだ、とか、相手の見せた感情に対して、自分も心が動くということ（相手をわざと怒らせたりするようなテストとはまったく違います）。そういうことがお互いに起こるように、相手の話を聞けばかりでなく、こちら自分もさらす話をかなりしました。

なぜこんなことをしたのかというと、これまでの経験から、しんどい現場ほど、感情的な関係（相性）が重要だということを痛感していたからです。うまく説明できませんが、いわゆる仲のよさとは違うかたちで、感情的な信頼関係が重要で、それがあれば踏ん張れるし、なければあっさり崩壊する。そこでは肩書きとか権威とかは、じつは通用しない（それらでごり押しすればブラックになります）。つくりかた研究所は間違いなく、へんな私たちでしんどい現場になるはずだ。そのためのチームづくりには、感情的な相性まで見極

めておかなければならない、と考えていました。

ただし、全員と面接した結果、感情の動かない面接はなかったし、また、みんな切実な何かを抱えていました。ほかに強いて判断材料をいえば、いまいる場所とは別に、もうひとつの場所を求めていること（これは全員がそうだった気がします）、あとは、なるべく他に行き場がなさそうな人。というどと語弊があるかもしれませんが、何か考えてるんだけど目標が不明瞭だったり専門が不明確で分類しにくいタイプ。はっきりこれという専門技能をもっているよりも、もっと曖昧模糊としたゾーンこそが、この研究所にはふさわしいように思えました。けっきょく優劣などつけようがなく、組み合わせの相性（私とのではなく、メンバー同士の）とバランスを考えての判断になりました。採用は、予定より三名多い一五名。年齢は、下は大学二年から、上は三〇すぎまで（「若手」かどうかは自己判断につき）。これにベテラン枠とスタッフ枠（というのを設けていました）の総勢二八名で、実体としてのつくりかた研究所がスタートします。

\*

梅雨明けを数日後に控えた七月二日。全員揃って顔合わせを行いました。この時点では、

全員のことを知っているのは私だけです。ぐるりと全員の顔を見回すと、思った以上にシャイな人たちの集まりで、これは私のせいもなくはないでしょうが、そもそも「つくりかた研究所」というアイデアが、こういう人間たちを招き寄せたのだとも思います。

この日は、「つくりかたから考える」をテーマに掲げる研究所の発足を宣言するとともに、もうひとつ重要な話をしました。「だれかのみたゆめ」についてです。

「だれかのみたゆめ」というのは、このプロジェクトの副題にもなっているフリーズで、この時点では、初年度に行う予定でいた企画のタイトル（テーマ）でもありました。研究所を発足させたら、みなでひとまず取り組む課題として、まちなかに「だれかのみたゆめ」が出現するようなイベントがくれたら面白いのではないかと考えていたのです。目撃した人が「なにこれ、だれの見た夢なの??」と思うような（たとえそれが悪夢でも）。ちなみにアイディアのソースは夏目漱石の『夢十夜』です。「だれかのみたゆめ」をタイトルにし、「こんな夢を見た」で始めさえすれば、相当自由にいろいろな種類のことができるという目算がありました。

ところでこのフリーズについては、もう少し考えていることがありました。「だれかのみたゆめ」は取り組む課題のテーマでもありますが、それ以前に、この研究所自体が「だれかのみたゆめ」でありえるはずだ。私の夢ともいえるし、このプロジェクトと一緒に温め、

進めている東京文化発信プロジェクト室（現アーツカウンシル東京）の人たち、発足にあたってのベテラン／スタッフ一同。そして応募してきた若手研究員。みな何かしらの期待をもってここに集まってきているはずで、その意味で「つくりかた研究所」はここにいるみんなの見た夢、見ている夢だと言えなくもない。こういう物言いは青臭いような気恥ずかしいような気がしますが、でもそういうことです。そうなつていくに違いない。

さらに、唐突ですが、中国の古い言い伝えに、蜃気楼の語義の話があります。蜃気楼とは、天気の良い日に地上や海上に見える幻のアレですが、漢字では「蜃（はまぐり）」の「氣」の「楼（大きな建物）」と書き、海底で大きなはまぐりが吐いた気（空気、泡）が、海上で都市の姿になるんだというのです（江戸時代の妖怪図鑑『画図百鬼夜行』シリーズのなかで、鳥山石燕という画師が描いています）。このイメージは面白い。というのも、妄想を飛躍的に拡大すれば、いまわれわれが生活しているこの都市も、どこかのはまぐりが吐いた気かもしれない、海底で眠るはまぐりの見ている夢かもしれないのです。まあ、はまぐりとはかく、しかし例えば東京という都市を、やはり「だれかのみたゆめ」の実体化と考えることは、あながち的外れではないはずです。この都市を計画した人たちがおり、この都市の膨大なディテールを日々更新しながら生活している人たちがいる。そういう「だれかのみたゆめ」の集積であるまちのなかに、小さな「ゆめ」のひとつとして、研究所が

実体化する。ここでは研究員たちが、さらに「だれかのみたゆめ」を（イベントとして）実体化すべく研究にいそしんで……。

キックオフの時点では、こういうコンセプトを考えていました。

\*

とはいえ最初の課題は、研究員たちの関係づくりでした。「仲よくなる必要はありません（それが目的ではないので）」と、私は口をすっぱくして言っていました。でもゆくゆくは連携や共同作業が必須なので、研究員同士がお互いに知り合うためのよい方法はないかと、所長となった佐藤（慎）やスタッフの東彩織と考えました。

東京都の文化事業の一環であるこのプロジェクトは当然ながら東京が舞台で、しかも（発端である演劇系としては）劇場からまちへどんどん出ていこうという理念だったので、若手研究員にはまちのリサーチをしてもらうのがよい。ならばこの二〇年足らずですっかり増えたコミュニティバスに乗りまくって、報告を上げてもらうことにしよう。

コミュニティバスを選んだのは、ふつうの電車やバスよりも地域に密着したルートを走っており、料金が安いためでもあります。しかしこのときの一歩の理由は、夏の暑さで

した。近年の夏の暑さは酷すぎる。さらに都心部となると常軌を逸しています。そこを無理して出歩いて体を壊すわけにもいかない。かといってまだよく知らない同士、まだやることもはっきりしないまま閉じこもって顔を突き合わせているのもしんどい。だからバスを使って外に出ようというわけでした。

東京といつてもはじめから全域が対象では広すぎるので、ひとまず二三区に限定し、それを五つのエリアに分けて、数人ずつのグループで担当してもらうことにしました（一部スタッフやベテランも参加）。このグループ分けは、所長が中心となって、やはり相性を考えて、かなり慎重に組み合わせを決めました。

このバスリサーチ（「外回り」と呼んでいました。ちなみに「内回り」は文献調査）は、報告を受けているかぎり面白そうで、いろいろな可能性を秘めていると感じました。まもなく今年度の課題として取り組むイベント「だれかのみたゆめ」にも、バスが使えるんじゃないか、とも考え始めました。いっそバスを走らせる（バスに乗ってめぐる）イベントにしようか。だとしたら、とっとと試しにバスを走らせて、自分たちで乗ってみようか。研究所内（主に私や所長近辺ですが）でにわかになんかという気運が高まり、九月には実際にバスをチャーターして独自のルートを走ってみることにしました。

この通称「バステスト」では、二日間に分けて、二つのコースを試走しました。いまこ

こで詳しくは紹介しませんが、ひとつは若手研究員から出た、地元を知る人がガイドとなって回るプラン、もうひとつはベテランから出た、架空の人の一生をたどりつつ、都心を横断するプラン。どちらも大変だったけれど、いろいろな発見があり、面白かった。

この二日間にわたるリサーチを受けて、若手研究員たちには、翌一〇月の全体集會までに、何らかの企画アイデアをもち寄ること、という課題が出されました。

これが、つくりかた研究所のありかたを根本的に再考させるきっかけとなったのです。

\*

その日、一〇月一日は、昼間、夏が戻ってきたかのような暑さで、風も強く、商店街のシャッターがガタガタと音を立てていました。日が暮れて、会場である秋葉原の建物に、研究所のメンバーが集まってきました。

この日は若手研究員が企画をもち寄り、それがもしかしたら年度末のイベントにもつながるといふことで、文化発信プロジェクト室から森さん、研究所担当の坂本有理さん、三田真由美さんも聞きに来ていました（三人ともバステストにも参加していました）。

若手が一人ずつ発表し、それに対してベテランがコメントする、というかたちで会が進

みました。緊張する若手の発表に、ベテランが明らかに上から寸評を加えるような具合になり、とても重い、嫌な空気になりました。若手にとっては初めての、自由な思いつきの発表の機会であったはずなのに、いきなり最終審査会のような基準で、着想の妥当性と実現可能性を厳しく問われるような場になってしまった。

このときのことは、いま思い返しても残念で、不本意で、悔しくなります。こういう事態になったのは、場を取り仕切っていた私の責任です。権威主義的だったり暴力的だったりすることを日ごろあれだけ嫌悪しているのに、自分がそうなってしまった。

あの場には、いくつかのすれ違いというか、位相の異なる力が働いていました。私には、年度の終わりにイベントを行い、成功させなければならぬプレッシャーがかかっています。それは研究所のスタートにあたって事業計画書に盛り込んでいた事柄で、それを含めてこのプロジェクトはGOサインをもらい、東京都との共催事業として、予算をもらっているのです。たんなる未定の予定では済まない、約束です。そのプレッシャーが当然ありました。

そして実現させるためのスケジュールを逆算すると、もうそろそろ具体的に考えなければならぬタイミングが近づいていました。そういう焦りもあり、知らず知らずのうちに、若手の発表に、実効性のあるアイデアを探そうとしてしまっていたのです。

しかし、私のプレッシャーや焦りは、若手研究員にとっては預かり知らないことでした。急にそんなものを押しつけられても困る。腹を立てて、厳しい（誠実な）メールをくれた研究員もいました。私は面談でその研究員が権威的なもの、父権的なものを嫌っていることを知っていたので、なおさら申し訳なく思いました。

ただし、ここで問われていたのは、たんなる私の振る舞いではなくて、この研究所がいつたい何なのか、ということでした。

ここが学校ではない、というのは最初から公言していたことです。では職能集団かという、当初はエンジニアのような人材の育成も想定していたけれど、実際の応募を経て集まってきた（採用した）顔ぶれは、必ずしもそうではない。演劇関係からの者が多いといえど多いが、劇団のような集まりでもない。私はこの研究所を、アーティストの養成機関でもなく、マネジメントのプロの育成機関でもないと考えていて（そういう場は他にいくつもあります）、たしかにここに集まった若手メンバーは、いわゆるアーティスト志望とも、マネジメントのスキルを磨きたい意識のもち主とも違う、ずれた志向をもっていました。そこそそを私が、よしと思つて選んだのです。しかしこのゾーンはいつたい何だろう。個々にはタイプもバラバラですが、そのばらつきも含めひとつの集団として見たとき、これは例えば私が教えに行っている芸術系の大学の学生たちとも違い、学者や研究者とも違



い、演劇の制作現場とも、観客の集まりとも違う、私には経験のない種類のグループでした。私はいったいどういうカテゴリーの集団をつくってしまったのだろう。そしてこのメンバーと何ができるのか。

ここでひとつの決断をしなければなりません。時間のないなかで、来るイベントを成功させるなら、私かベテランの誰かの主導で進めてしまうのが確実です。というかそれしか手はない。トップダウンで進め、みんなは指示と役割分担に従って実働部隊としてがんばれば、イベントは実現でき、経験も積めるだろう。だがそれでいいのか。

私のお膳立てがいかにまずかったとはいえ、ここに若手として集まっている人たちは、上から何かを指図されてやらされることに、驚くほど敏感で、抵抗を感じるタイプなのだという 것도、私はこの日、痛いほど感じました。この敏感さと抵抗は、何を意味しているのか。いずれにせよ、この感度を無視してごり押しすることは、何も生まないばかりか、害にしかならない。では、どうするのか。

彼らと「つくりかた研究所」をどうつくっていくのかが問われていたのです。

\*

つくりかた研究所は、そもそも何をやる場なのか。ここに集まったメンバーは、いったい何者なのか。プロジェクトを主導する立場にありながら、私は根本的なことがわからなくなりました。

彼らがアーティストで、ここがその育成や活躍の場だったら、話はずっと単純です。

私の理解ですが、アーティストというのは（「足るを知る」ならぬ）「足りないを知る」人たちで、何か足りないと感じ、それを何とか自分でつくろうとする。そして自分の作品についても、傍目には完成しているように見えても、本人にとって何か足りないければ、絶対に納得しない。他人には見えない「足りないさ」にいつも追い立てられている。だから基本的に満足していないし、焦っていて、自分でどんどん積極的にやろうとする。自分でやらなければ、この「足りないさ」はけっして埋まることがないのも知っている。

こういう人たちは、放っておいても勝手に何かをやるし、本人たちがどんどんやるかぎり、サポートもできる。私がふだんドラマトゥルクという肩書きでしている仕事は、こういう「足りないを知る」人たちが何かをつくる際に、その「足りない」を理解（しようとし、本人が一層自覚的に、精度を上げて、作品としてかたちにするのを手助けするようなことです。これは相手がベテラン（研究所内の区分でなく、いわゆる世に言う）でも若手でも学生でも変わりません。

ところが、研究所の空気は、そもそもそういう感じではない（アーティスト志向の者も、また何らかの専門技能をもっている者もいらないわけではないけれど）。だからといって、アーティストの作品づくりを手伝いたい、とかいうのとも違いそうです。勉強したいから手伝わせて下さい、というのはよくある健全な現場への入りかたのひとつですが、そういうモチベーションとも違うようだ。もつと何かくすぶっている。

私の頭が混迷を極めている一方、若手研究員の間では、自主的な活動が始まろうとしていました。若手同士でも、お互いが何者なのかまだ知らなさすぎる、ということ、それがこれまで関わってきた「つくりかた」を話す／聞く会が生まれてきました。また、読書会のようなものや、まちの隙間にじゃがいもの種を植えられるか、といった得体の知れない自主企画のようなものが動き出しつつありました。

こうしたなかで、いちばん最初に誰が口にしたかは思い出せないので、*「研究室」*というアイデアが生まれてきました。開室日（このプロジェクトは研究所といってもフルタイム稼働ではないため、活動日以外にも、ときどき拠点となる部屋を開けて、研究員が雑談できるような日を設けていました）に集まった数人のうち、誰かが口にしたのを、その場にいた私が拾ったのです。研究所なのだから、研究室があつて当たり前。なぜいまで思いつかなかつたのだろう。「つくりかたから考える」研究所が、みなでひとつのつ

くりかたを考えなければならぬ理由はない。みなでひとつのことに取り組もうとするかぎり、統率上どうしても上下関係・主従関係が出てきてしまう。そして上から降ってくる「お題」に答えるようなかたちを、この研究所の誰も望んでいない。それは上に立つことになる者もきつと同じに違いない。

私を筆頭に、おそらくみな、誰か一人がえいっと仕切って進めてしまえば、何かがかたちになるのはわかっていました。でもそれがこの研究所に似つかわしいとは思えないし、それをあえて実行したところで、誰も幸福にならない。この研究所は、誰であれ、特定の誰かの「作品」をつくるためにあるのではないし、他の者もそれを手伝うために集まっているのではない。ならばいっそ、全員で何かに取り組むようなことはやめて、個々の研究員が、個別の研究室を立ち上げるようなかたちにするのがいい。研究課題から自分たちで見つけたい。

こうして研究所は、トップダウンの組織から一八〇度舵を切り、ほとんど自由放任の、小さな活動の集合体へと姿を変えようとしていました。

\*

複数の研究室からなる研究所。この、ごくありきたりの組織形態への方針転換の裏には、いくつかの大事な問題意識がありました。

まず、「つくりかたから考える」を看板に掲げたわれわれは、そもそも自分たちの組織をどうつくるか、から考え始めざるをえませんでした。

このことを無視して、トップダウンでほしい進めてしまえば、楽だし、それなりの成果だつて出せるでしょう。バスを使ったイベントだつてきただろうし、または、世の中のいろんなつくりかたを研究・カタログ化し、社会科の教材（よくも悪くも）みたいな図鑑をつくることだつてできたでしょう。しかし、「つくりかた研究所」である以上、その手前で、自分たちの活動や組織がどうあるのがよいのかを、考えずにはいられませんでした。じつに面倒くさい話です。でもこのことは、「つくりかた研究所」というアイデアがじつは必然的に要請してくることであり、そこに吸い寄せられていくようなメンバーが、そもそも集まっていたのです。

もうひとつ、大事なことがあります。こうやって表出してきた問題は、すなわち、アートプロジェクトのような活動を、どう考え、実行していくか、その根幹の部分にふれていました。与えられた枠組みに乗っかって、楽しく活動するのもよい。けれどもそうすることに、何か違和感を持ち、どこか乗り切れずにいる人たちもいる。そういう人たちが、で

も何かできないか、もうちょっと違う場はないのか、という期待を込めて、「つくりかた研究所」というアイデアに集まってきたのではないか。だとしたら、何かしらのフォーマットができつつあり、乱造されつつあるいろいろな活動やイベントの、枠組みやルール自体を、いま一度立ちどまって考え直し、馬鹿正直に問い直すのには、うってつけの集団だということになる。そこからやらないで、何が「つくりかた研究所」か。

初年度の終わりに向けて、つくりかた研究所の活動の意味合いは、たんなるスキルやハウツーの蒐集・研究・開発というよりも、はるかに倫理的な様相を帯び始めました。倫理的、というのは、「なぜ」を問うという意味です。もちろん「どうやって」も大事だし、「つくりかた」の研究の大半は「どうやって」の側にある。けれども、それとセットで、「なぜ」を考えずには進められない。どうやって／なぜアートプロジェクトのような活動をするのか。どうやって／なぜ集団をつくるのか。

いまさらですが、この研究所の、プロジェクトとしての正式名称は「長島確のつくりかた研究所…だれかのみたゆめ」といいます。私の名前が恥ずかしくもなく冠についているのは、私が率先して企画し、始動させたからです。この得体の知れない活動で、万が一何かあったときに、責任を取らされる、という意味でもあります。クビを差し出しているわけです（冗談ではありません）。研究所の初年度に予定していたイベント（「だれかのみ

ためめ」は、いまお話したような、活動体制の大幅な変更にともない、中止することに決めました。おかげで初年度には、外部に出せる成果が何ひとつなく、東京アートポイント計画の年度末の活動報告会（一〇以上の団体が参加しています）で、私はガチガチに緊張して、そのことを白状しなければなりませんでした。

けれども、とにかく、つくりかた研究所は、いつそう「つくりかた研究所」らしく、二年目へ継続することになったのです。